

構造と歴史：人類学的理解に関する2つのモデルについて

平松, 礼子
九州大学教育学部

<https://doi.org/10.15017/2235358>

出版情報：九州人類学会報. 13, pp.47-55, 1985-08-01. Kyushu Anthropological Association
バージョン：
権利関係：



構造と歴史——人類学的理解に関する 2つのモデルについて

平松 礼子

はじめに

私たちは、日常生活において、あるものを「よいもの」「好ましいもの」、またあるものを「悪いもの」「好ましくないもの」として位置づけているように思われる。その際の分類の規準は、普段、生活の中に埋没しているために殆んど問題にされることはない。従って、このことが敢えて問い直されるのは、その日常性の中に支持をもつ規準と、私たちがもつ萌芽的な内的規準との間にあるズレが自覚的にとらえられた時に限られてくるように思われる。その時初めて、私たちはふと立ち止まり、後ろを振り返るのである。

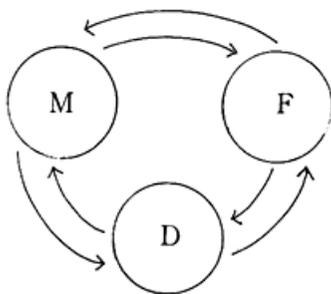
1. 序

人類学においては、長い間、観察によって得られた事象、即ち「見る」という行為によって得られた事象が、無条件に「事実」として位置づけられてきたように思われる。その中でも特に、歴史的説明に依拠する場合と構造的説明に依拠する場合には、その「事実」というものをめぐって、基本的な対立があるように思われる。しかしながら、これは、どちらかが正しくてどちらかが間違っているというような問題なのであろうか。本論では、これら2つのモデルによる理解がどのような性質のものであるのかを、いくつかの親族関係や社会関係に関するモノグラフを読み直しながら考察していくことにする。

2. 歴史的モデルによる理解

J. フォックスは、Thie(東インドネシア・ティモールのロティ)における社会、親族関係の歴史的な再構成を行なうことによって、その島の独自性と東インドネシア社会の多様性とを説明している⁽¹⁾。

Thieの親族組織に関するフォックスの統計学的研究によれば、現在Thieには、明確な3分組織から成る通婚関係が認められるという。つまり、Manekを代表とするSabaraiのメジャークランと、



Fetorを代表とするTaratuの諸クラン(政治的役職を担う2組織とDae Langgakを代表とするSabaraiのマイナークラン(儀礼組織)との間にとり結ばれる通婚である。この分類は、現在のThieの人々による口述とほぼ完全に一致しているという。

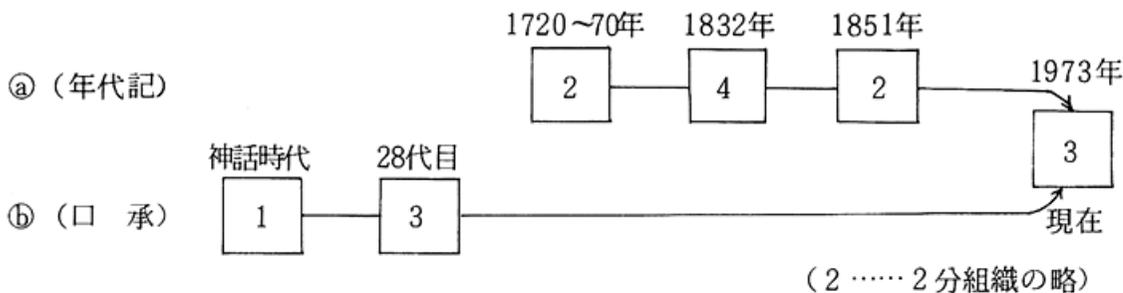
フォックスは、この3分組織の歴史的な成立過程をオランダの植民地時代の記録をもとに追っている。その資料によれば、そのころ行政官たちによって基本的なものと考えられていた半族組織が形成されたのは、1720～70年の間のことであった。その後、1832年の人口調査では4分組織が認められるに到っている。しかし、この4分組織が見い出されるのは記録書の上ではわずか20年間であり、1851年発行の資料では、Thieは再びManekとFetorの管轄で厳密な政治的半族組織を成すと見られていた。20世紀に入るとこのシステムは、「支配の強化」制策のもとにさらに合理化されることになったという。ここでは、現在その存在がはっきりと確認されているという儀礼組織は、殆んど無いに等しいも

のだったわけである。

また、フォックスは、これらの資料をもとに、かつてファン・ウーデンが認めていた交叉イトコ婚やニーダムが言う規定婚は、現在のこの社会には存在しないと主張する。つまり彼が言うには、「現在のロティ人は、彼ら自身の歴史によってそこから解放されており、常に変わりゆく過去とともに生きて行かねばならない」⁽²⁾のである。

一方、これらの変化は、Thieに住むロティ人自身にとっては、どのようなものと考えられているのであろうか。フォックスは、上述の説明と同時に、口承による歴史の構成を試みている。Thieの人々によれば、領土(ヌサク)の分割は全て、語り継がれた系譜に現われる世代を越えた継続的な出来事の結果であるという。40数名の名前によって形成されるManekの系譜は、Thieの社会の成立に貢献した祖先についての物語から始まる。この系譜の中では、半族組織が確立するのは28代目と伝えられている。しかし、これは単なる2分割を示すものではなく、表面上には現われない内的システム(儀礼組織)を含んだ3部構成によって成り立つ組織を表わすものである。この組織は28代目の3兄弟によって作り出されたものと考えられているという。また、それら集団を結ぶための婚姻規則もこの時期にできたと言われており、その場合の契約は、あるManekが催した祭礼の内容にその端を発している。各クランは、それぞれに父親の系譜、母の兄弟のルーツ、母の母の兄弟のルーツというものを辿る集団に分かれ、Thieの社会を支える外婚体系を成すと考えられているという。

上述の事例に見るように、直接的な記録資料に基づく歴史と口承による歴史とは、全く異質なものになっている。両者は次のように図式化されることができよう。



一般に、より客観的であるとされている①の形式の説明においては、その共通の手段としてヨーロッパに照準を合わせた「年代」というコードが用いられる。特に、この例が示しているように、経験的により確実な資料が必要とされる場合には、そのコードは特定の「歴史領域」⁽³⁾に限定されてくる。従って、「歴史上の出来事の始まりが、歴史編集の出来事の冒頭と一致する」⁽⁴⁾かのように記述されることになる。Thieの半族組織の歴史が18世紀前半に始まり、オランダの植民地行政による合理化の過程として描かれているのはその一例であろう。その場合の構成物は、切り取りによって修正を受け、記録者の意識の中では、主観的な歪曲を免れた実際の歴史であると見なされているように思われる。

しかし、この歴史的モデルは、以上のような種々の特性を保持しているわけであるから、当然何らかの意味を含んだものであると言えるであろう。「『客観的』言述から意味を除去することは、新たな意味を生み出すだけである。即ち、ある体系における一つの要素の不在は、その存在と全く同じように重

要なものであるということを再び確証させるだけである⁽⁵⁾』というバルトの指摘は的を射たものと思われる。

また、Thie の事例のように、一つの現象に対して2通りの説明が可能であるということは、どのようなことを意味するのであろうか。フォックスの説明から拾い出せるように、西暦にそった文書記録から伺い知れるThieの権威の対立はManek/Fetorという政治上の対立であったのに、口承の歴史の中では、Manek、Fetor/Dae Langgakという政治/儀礼の対立としてとらえられている。これは、「部外者による集団の解釈は、決して内集団の自己解釈と完全に一致することはない⁽⁶⁾』というシュッツの見解にも通じることのように思われる。ということは、仮に事実というものを主観と客観との一致、あるいは「見るもの」と「見られるもの」との見解の一致にあるとするならば、年代にそった歴史は事実を示しているとは言えないことになる。むしろそれは、「歴史家自身の意識構造において前認識的かつ前批判的である限りは、詩的なものである⁽⁷⁾』とさえ述べることもできるであろう。

4. 構造的モデルによる理解

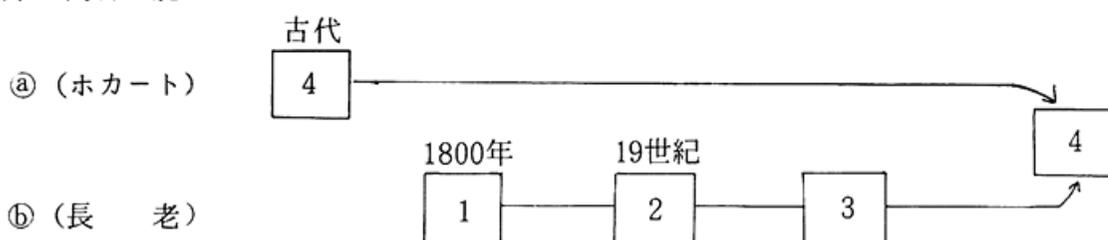
①構造と口承の歴史

A. H. ホカートが中心的な研究対象としたフィジー⁽⁸⁾は、4分組織の存在で知られる。彼は、その地域で調査を行なう際に、土地の貴族階級の人々と親交を結び4分組織の成り立ちについて聞く機会をもった。そこの最長老によれば、組織の分割が行われたのはそれ程昔ではないという。起源となる王家の出現は1800年より前に溯り、分割が生じたのはその子孫の時代であるとのことである。王家は、時の推移に従って余りに拡大しすぎたために、19世紀になって1人か2人の勢力者によってクランとして分けられた。しかし、それらは公的な仕事を公平に負っていないという理由で、まず初めに、最も新しい分派であるDが分離させられることになる。次に、残りのクランが拡張したためにAが離されることになった。残りのクランのうちBは公事に熱心であったが、Cは私事を優先させ、それらの仕事を無視したという理由で、分相応の仕事をするようにと、そこから切り離されることになったという。かくして4分組織は出来上がったわけである。

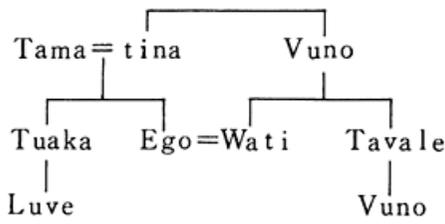
しかし、ホカートは、直接的な証拠に基づく歴史的説明は、事実の断片だけしか告げ得ないために全体的説明に失敗しているとして、これらの証言をあさりとほねのけている。彼は、このフィジーにも、アラング族やウィンネバゴ族に古代からあると考えられている2項対立的な構造が同様に古代から存在していたと仮定することによって、その4分組織の儀礼・婚姻関係の分析を行なうことになるわけである。

だが、彼が長老の説明を全く受け入れようとしないのは、(未開人の言うことなんか、どうせ当てにならない。だから歴史も信用できない) からかもしれない。

以下に両者の説明を図式化しておくことにする。



さらに、彼は、フィジーの親族関係に関する従来の研究について次のような指摘をしている。下図は、フィジーの系譜関係を表わす図であるが、この図のうちTamaという名称は、長い間「チチ」とみなされてきた。



それが「チチ」だけでなく、「オジ」や遠い「イトコ」まで同じ名称で呼ばれているということが判明して以来、このTamaという名称は、本来「チチ」を意味していたものが「チチのチチ」、「チチのチチのキョウダイのムスコ」などに派生したものと考えられるようになった。これは、ホカートによれば「親族延長」という言葉で

表現される誤謬であるという。彼は、「過去における発展の過程を記述しているという意味で歴史的なこの教義が、起源の進化や歴史的再構成を揶揄し続けてきた人々によって最も頑強に擁護されているというのは奇妙なことである⁽⁹⁾」としている。

そこで、彼は以下のように、これらの名称を、個人に対してではなく、世代という縦の軸と、父方・母方という横の軸とによって分類しなおしたわけである。

	Tama	tina	Vuno
Tuaka	Ego	wati	Tavale
Luve		Vuno	

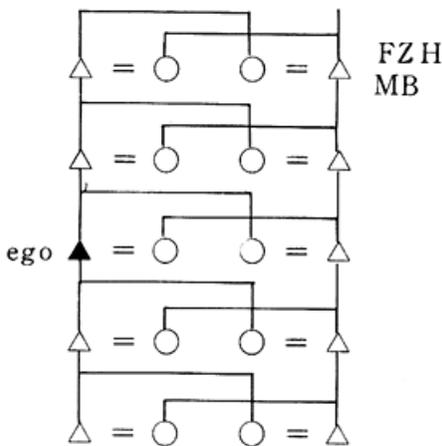
彼は、それぞれの名称の内容に関して、「これらの名称の究極的意味が考察されるまでは、根拠のない当て推量に留まざるを得ない⁽¹⁰⁾」と記している。

②構造と年代期的変化

R. ニーダムは、プルム族（ビルマとインドの境に住む）に関するT. K. ダスの調査資料を用いることによって、この社会の村間、クラン間、リネージ間に、一方向的な規定婚が存在することを立証することに成功している⁽¹¹⁾。だが、当のダスは、その資料をニーダムの意図するところとは全く別の意図で提示していた。つまり、ダスが問題にしていたのは、村内婚に関して言えば、第一イトコとの婚姻が、1935年時と1945年時においてどのような様態を表しているかということであって、ニーダムのように、その中からカテゴリーとしてのイトコの婚姻規則を抽出しようとするものではなかった。従って、1945年にKhulen、Tampak、Chumbangというそれぞれの村から、実際の婚姻としてダスが得たデータの内訳は、MBD（第一イトコ）、Mのクランの女性、それ以外のもの、という3種類を対象にした婚姻に振り分けられることになる。ダス自身は、そのデータに対して、「⁽¹²⁾実際上の困難のために規則が和らげられた」、「外部からの文化的影響によって変化した」という説明を与えている。しかしながら、ニーダムの方は、それらの資料を見る限り、FBDとの婚姻を禁ずるような事例は見当たらない、ということに立脚して、Mのカテゴリー以外の婚姻も分類上のMBDに関連しているに違いないと見なし、結局、プルムの村内の婚姻の殆んどが分類上のMBDを対象に行なわれているという結論に到ることになる。そういう意味で、「ダスの民族誌は矛盾しており……分類された婚姻の統計も誤まり⁽¹³⁾」であり、「人々は、これをプルム族の供述の記録として正しいものと仮定するかもしれないが、それらは、分析においては全く無益である⁽¹⁴⁾」と判断されることになるわけである。

③構造的進化

更に、ニーダムは、人間の観念の反映としての社会制度の変化に関する研究の例として、ワラウ族（ベネズエラのオリノコデルタに住む）に関する Suárez の研究（1971）を取り上げている。⁽¹⁵⁾そこにおける中心的問題は、ワラウの関係名称から予測される構造的進化である。彼女は、初期の対称的規定婚が、無系や非規定型の方向に、徐々に部分的崩壊を来たしているという仮説を提出している。一般に、規定的分類社会においては、 $F B \neq MB$ が、有系であることを織別する際の鍵とされる。ところが、ワラウの関係名称は、dehota、dimuka…… $F Z H = F B$ 、daku…… $F Z H = MB$ 、従って $F B = MB$ となっており、有系であることを示してはいない。しかし、このように $F Z H$ が $F B$ と同じ名称によって示されるのは、Suárez によって記録された1971年時だけであり、それ以前の資料の中には、 $F Z H$ 独自の名称は存在しないという。また、女性の位置に焦点を当てると、 $F B W = MB W$ （1971）とな



っているが、これも有系的特徴を示すものではない。もしも完全に一貫した関係名称であれば、 $F B \neq MB$ は $F B W \neq MB W$ を伴うはずだからである。他方、egoの一代下では、 $S \neq Z$ という有系的特質が見られる。

Suárezによれば、このような矛盾（対称性と無系性の混合）は、1971年以前、少なくとも関係名称に見る限り、1825～1968年までの143年間（外部からの文化的圧迫を受けているにも拘らず）、さらに言語学上のデータから推論すれば、4000年もの間、構造的な変化は経験していないという。ニーダムは、この矛盾から導き出した進化の仮説を特定の要因によ

って説明しようとはしない。むしろ重要なことは、全く異なる環境でありながら同様の進化形態を示するというその可能性であるという。ただ、彼が特別に取り上げている要因として、4000年の昔から密接な関係にあったと考えられている Yanomamö 族との構造的類似性がある。この要因を含めた種々の要因が累積することによって、ある分類体系が別の体系に変換されると彼は考える。この場合に仮定される傾向は、「自由度や個別性の増加した連続的プロセスにおける、単純から複雑へ、制度から協定へ、規定から無規定へ、カテゴリーカルなものから選好的なものへ」⁽¹⁶⁾という変化であるという。

5. 構造的モデルの性質

前章のそれぞれの事例から考えられるのはどのようなことであろうか。

ホカートは、直接的な証拠に基づく歴史的説明は全体的説明に失敗しているとして、フィジーの長老の説明を無視している。ニーダムもまた、ホカートの発想に従うことで、1945年時におけるブルム社会の婚姻体系を規定婚の崩壊過程としてとらえたダスの見解を誤まりとして退けている。このように、ある種の歴史的説明を否定する構造的モデルは、独特の性質を伴ったものと言えるであろう。フィジーの親族名称に関する考察は、その性質をよく示すものと言える。かつての研究では、フィジーにおける親族名称については、もともと近親者に用いられていた名称が、遠い親族へと延長したものであるという説明が与えられていた。これは、必ずしも実在の時間軸の上でとらえられたものではないが、そこに時間的なずれが認められるという意味では、ホカートが主張するように歴史的説明であると言えるであ

ろう。一方、それを修正したと考えられている構造的説明においては、それぞれの名称は、図に示されているように、任意のエゴとの関係を表わす一まとまりのカテゴリーとして表記される。従って、ここでは、名前というものが個人の本質を表わすという発想は消える。しかし、カテゴリーであるとはいえ、そこに究極的意味を求めるといふ点では、ホカートもまた本質論を指向しているものと思われる。

また、ニーダムも、構造的モデルを用いているという点ではホカートと同様であると言えるが、別の次元で、両者の間には大きな差異があるように思われる。つまり、ニーダムは、基本的にはホカートやレヴィ・ストロースの見解を受け継ぎながらも、「基本」構造が親族一般に敷衍されるという点に関しては懐疑の念を抱いている。ニーダムが厳密な意味で構造と考えるのは、親族の用語と婚姻規則とが一致する「規定的」な体系であり、この体系が実際に存在する社会を、彼は、構造的に統合された社会と考えたわけである。とはいえ、彼は、後には「変化」というものを取り入れるようになっている。それは、想定されている要因こそ全く異なるが、変化した後の形態は、むしろ彼が過去において否定してきたものそのものであるかのように思われる。この時点では、歴史と構造とが両立可能なものとしてとらえられるまでに到っているわけである。

一方、ホカートやレヴィ・ストロースによる構造モデルは、いわゆる実証科学が $1 + 1$ は必ず 2 になるという事実から出発するのに対し、 $1 + 1 = 3$ になりうるという理論的可能性から出発していると言ってよいであろう。つまり、 1 、 2 、 3 ……という数は、個別に実体をもつものではなく、単に差異を表わす関係的な記号であると考えられるわけである。従って、このモデルに依拠する場合には、それが普遍的なものであることが構造の構造たる所以であるので、ニーダムが考えるように構造そのものの変化が問題にされることはないように思われる。

6. 歴史的モデルと構造的モデルの比較

①相違点

相違点に関しては、3、5、で既に明らかであると思われるので、ここでは、その骨子だけを述べておくことにする。

まず、本論でとり上げた歴史的モデルは、私たちの生活世界における「現在」という時間が確かに存在するものであるという観念を前提として成立しているように思われる。従って、この場合には、過去も未来も、この「現在」を中心にして予想されるものとなっており、その全体は、一見、不可逆的な連続体の姿をとるものになっている。

それに対して、構造的モデルは、一般に自然的現象であるとみなされているこの時間の観念が、実は文化的産物である、ということが指摘された後に出現してきたものであると言えよう。従って、それは、経験的実在ではなく、経験的実在に基づいて作られた体系としての性格を示している。また、そのために、構造の一要素の変化は、構造そのものの変換を予測させるものとなっている。

②類似点

一般に、歴史的モデルと構造的モデルとが対立するのは、上述のように、相方に内在する原理のどちらかが絶対的なものであるということが主張されている場合であると思われる。例えば、因果関係の原理は、原因が結果に時間的に先行しているということや、社会学的な集団間の婚姻関係の総体はコミュ

ニケーションの体系であり、一つの意味を成すということに関してである。しかしながら、種々の事例の説明の仕方を検討してみると、これらのどちらかが絶対的な根拠を持っているとは言えないように思われる。

例えば、フォックスやダスの説明の仕方に目を向けると、それぞれの社会の「婚姻規則の崩壊」(A)という現象——これが原因となって、彼らは何らかの原因を過去に捜し求めることになる。それは「植民地行政の合理化政策」であるかもしれないし、「外部社会の影響」(B)であるかもしれない。彼らは、この2つをつなぎ(B)→(A)という因果関係の連続を作りあげているが、これは、実際には、時間的な知覚の順序(A)→(B)を逆転した上で成り立った連鎖であると言える。ということは、彼ら自らが、時間の不可逆性という性質に反した説明を行なっていると考えることも可能なのではないだろうか。

また、レヴィ・ストロースやニーダムが、婚姻体系は一つの意味をもつと主張していることに対しては、婚姻体系はコードではなく回路である以上、それが言語体系と同一視される根拠はどこにもない、というダン・スペルベル⁽¹⁷⁾の指摘を受け入れることができると思われる。

従って、どちらのモデルも、他方を否定できるほど根源的なものとは言えないように思われる。

7. モデルによる理解の性質

上述のことから、2つのモデルは、人間の頭の中に生得的に存在する観念体系であるとは言えないことがわかる。また、3、5で示した図からも明らかなように、それらは純粹に現象の中に存在するものでもないということが言えるであろう。つまり、モデルを使った理解とは、「見る側」と「見られる側」との間に繰り広げられるものなのではないだろうか。そうであるとすれば、そこでとらえられたものは、「見られる側」がもつとみなされている意図を忠実に再現するものとは言えない以上、「事実」ではないながらも、ある何ものかであることには相違ないと思われる。

このことから、フォックスがファン・ウーデンやニーダムの構造的説明を、また、ホカートやニーダムが歴史的説明を誤まりであるとみなしていることは、そのこと自体が誤まりであるように思われる。従って、2つのモデルは、いわゆる未開人の口述を主観的なものとして否定することなどできないことになる。

それでは、この口述によるモデルはどのようなのであろうか。これこそが本当の事実であるということになるのであろうか。もしもそうであるとするならば、彼らが語る言葉を翻訳し記述したものは、彼らが心の中にもつ本当の意味であるということになる。一般に、異文化の人々の言葉(M)は、以上のような考えにそって、私達の言葉(A)と同一のものとしてそのまま置き換えられることになる。しかしながら、このMとAは、それぞれが、それぞれの言語体系の中で、どのような言葉と対応したカテゴリーであるかが問われれば、おそらく、類似しているとは言えても、同一のものであるとみなされることは不適切になるだろう。さらに、例えば、Mという語が(a、b、c、d)の文脈で用いられており、Aが(a'、e'、f')の文脈で用いられているとすればどうであろうか。MとAとは、類似点よりもむしろ相違点の方を多く持つことになる。このようなズレは、何も特殊なことではないように思われる。それは、私たちが調査者の特権として、私たちの言葉A(a'、e'、f')に基準を置き、それに似ているものを探すために、M(a)という側面のみに着目し、それによってMは当然(a'、e'、f')であると速断

するところから生まれるものであろう。そこで、基準をMの方に置き換えるとすれば、この対応関係はどうなるだろうか。Mが(a)の文脈で用いられる場合には、より近いものとしてAを用いることは妥当であろうが、Mが(b)の文脈で用いられる場合には、それに近いものが求められる必要がある。例えばB(b, g, h)などである。さらに、M(c)の場合にはC(c, i, j)が、M(d)の場合にはD(d, k, l)などが想定されることも可能であろう。ということは、Mは、私たちの言葉Aに似ている場合もあれば、B、C、Dによってしか説明のつかない場合も当然予想されるものと思われる。この時、Mをその総体として考えるとすれば、A、B、C、Dは私たちの頭の中では殆ど関連のないものであるかもしれない以上、この試みは逆に、私たちのもつカテゴリーの方を揺るがすことになるかもしれないのである。ということは、勿論、無条件に「MはAを意味する」とは言えないことになる。従って、ここまで考慮に入れればたとえ原地の人々の口述であろうとも、私たちがこれを「書く」場合には、それを事実であるとみなすことはできないものと思われる。現象に限りなく接近することは可能であっても、言語上の制約のために、両者が完全に一致することはありえないと思われるからである。

以上のことから、モデルというものは、どれか一つだけが絶対的な根拠をもつものではないということが明らかになる。ということは、私たちの知覚もまた、容易に逆転しうるものであるということが言えるであろう。大切なことは、私たち自身が、その存在の位相を変えることによって多角的な全体像をとらえていくということであり、それとともに、基準を対象の側に移すことによって、自らの依って立つ基盤を相対化していくことであると思われる。

モデルの性質についての考察をここまで押し進めてくると、対象を適格に捕えていると信じて疑わない私たちの足場そのものが、極めて危うい基礎の上にしかないということがわかる。まさに、このことのためにモデルというものは生み出されてきたのであるが、特定のモデルが、従来のように客観性を保証するものとして用いられる場合には、それは、原地の人々に対してメスを入れるだけでなく、同時に、人類学者自らの豊潤であるはずの経験世界を疎外し、自ら「部分」としてしか機能しえないという「研究する者」の悪循環を生み出すものとなるのではないだろうか。なぜならば、自己省察の型は、他者を観察する型と同じである外はないからである。本論の流れは、一つには、このような状況に陥っている私たち自身の経験世界を「回復」する方向を探ろうとするものでもある。

註

- (1) Fox, J. J. 1980. *The Flow of Life*. Harvard Univ. Press.
- (2) Fox, J. J. 1980. *The Flow of Life*. Harvard Univ. Press. p. 133
- (3) レヴィ＝ストロース, C. (大橋保夫訳) 1982. *野生の思考*, みすず書房 p. 313
- (4) Michael, Lane (ed) 1970. *Structuralism: a Reader*. Jonathan Cape. p. 147
- (5) Michael, Lane (ed) 1970. *Structuralism: a Reader*. Jonathan Cape. p. 154
- (6) シュッツ, アルフレッド (森川, 浜訳) 1981. *現象学的社会学*, 紀伊国屋書店, p. 55
- (7) White, Hayden 1983. *Metahistory*. Johns Hopkins. p. 31
- (8) Hocart, A. H. 1970. *Kings and councillors: an essay in the comparative anatomy of human society*. Cairo.
- (9) Hocart, A. H. 1937. *Kinship Systems*. *Anthropos* 32. p. 546

- (10) Hocart, A.H. 1937. Kinship Systems. *Anthropos* 32. p. 551
- (11) Needham, R. 1958. The Formal Analysis of Prescriptive Patrilineal Cross-Cousin Marriage. *Southwestern Journal of Anthropology* 14.
- (12) Needham, R. 1958. The Formal Analysis of Prescriptive Patrilineal Cross-Cousin Marriage. *Southwestern Journal of Anthropology* p. 81
- (13) Needham, R. 1958. The Formal Analysis of Prescriptive Patrilineal Cross-Cousin Marriage. *Southwestern Journal of Anthropology* p. 81
- (14) Needham, R. 1958. The Formal Analysis of Prescriptive Patrilineal Cross-Cousin Marriage. *Southwestern Journal of Anthropology* p. 84
- (15) Needham, R. 1974. The Evolution of Social Classification : A Commentary on the Warao Case. *Bijdragen tot de taal-, land- en Volkenkunde* 130. p. 16-43.
- (16) Needham, R. 1967. Terminology and alliance, 2 : Mapuche : conclusions *Sociologus*. p. 46.
- (17) スペルベル, ダン (菅野盾樹訳) 1984. 人類学とはなにか. 紀伊国屋書店. p. 146.

＜その他の主な参考文献＞

- Dumont, Louis 1965. The Modern Conception of the Individual. *Contributions to Indian Sociology* 8 : 13 - 61.
- Kronenfeld, D. & Decker, H.W. 1979. Structuralism. *Annual Review of Anthropology* 8 : 503 - 541.
- Leach, E.R. 1973. Structuralism in Social Anthropology. In *Structuralism*, D. Robey (ed.) Oxford : Clarendon Press.
- Needham, R. 1971. Introduction. In *Rethinking Kinship and Marriage*. A. S. A. Monographs II, London : Tavistock.
- 1972. *Belief, Language and Experience*. Oxford, Basil Blackwell.
- 1973. Prescription. *Oceania*, 43 : 166 - 181.
- Sturrock, John (ed.) 1982. *Structuralism and Since*.
- リーチ, E. R. (青木, 井上訳) 1972. 人類学再考, 思索社.
- ウィットゲンシュタイン, L. (藤本隆志訳) 1976. 哲学探究, 大修館書店.